

2024年8月25日

「竹、節ありて強し」

コリントの信徒への手紙二 4:16-5:8

坂元 高牧師

「竹、節ありて強し」という言葉があります。竹は中が空洞で、風に弱く、折れそうに見えますが、要所に節があるので、細長くても、風に負けず立っていられます（和竿職人、松本三郎さんのお話）。確かに節が硬く膨らんでいますので、もし竹全体に力が加わっても、ひしゃげずにぐっと引き締める働きがあるのですね。それは良く人生に例えられます。私たちの人生も人生の節目、節目で苦労、努力を重ね、鍛えられ細くても粘り強い人間にどうしたらなれるでしょうか。

今朝私たちに与えられました、第2コリントのパウロの手紙には、彼独特の人生観とキリスト信仰のすすめが、ちょうど竹のように粘り強い、キリスト信仰のすすめとして語られています。第2コリント4:16のパウロの言葉に、“だから、私たちは落胆しません。たとえ、私たちの「外なる人」は衰えていくとしても、私たちの「内なる人」は日々新たにされていきます。”とあります。本日の中心メッセージです。どうか目に見えるものでなく、見えない「霊なるもの」に目を注ぎ、心をくだく、そんな人生を生き抜いて欲しい。パウロはコリントの教会の人々に、いいえこの私たちに呼びかけているのではないのでしょうか。

私たちが「内なる人」「新しい人」へと変えられていく、それが私たちの「キリスト信仰」ではないのでしょうか。私たちは落胆しません。これまでの私たちの人生は、疲れ、時に絶望的にさえ見えても、その歩みの節目、節目に「竹の節」のように、私たちに粘り強く生かしてくれるキリスト信仰がありました。これからも、この信仰に希望を委ね生きて行きたいと願うものであります。